幼児・初等教育を出発点とするキリスト教主義教育

講演	森田　喜基〔もりた・よしき〕
講師紹介	頌栄短期大学専任講師

新島の幼児・初等教育への志

新島がある日、勝海舟に「ある少年がキリストの道を信じました」と言ったところ、「なるほど、それは素晴らしい。真理だから少年に分かるはずだ」との返事が返ってきたという話があります。新島は、小学生の世代と一緒に聖書から真理を学ぶ学校を創りたいと願っていました。それは若い人々と共に聖書の真理に触れることが、将来の日本を創ると信じたからです。新島はこのようにも語っています。「基督主義ノ学校ハ幼稚園ヨリ大学ニ至ル迄実ニ必用ノモノト信スレトモ、当時我輩ノ力尚微々タリ」（新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』２　同朋舎出版　１９８３年　４０４頁。以下②４０４）。

新島は当時の初等教育の荒廃を嘆き、また、同志社の中に小学校が興され、幼稚園より大学に至る一貫教育の必要性を感じておりました。新島はその夢を後に続く者たちに託し、今日の同志社があるのです。

はじめに

学校法人同志社は現在二つの大学、四つの中学・高等学校、二つの小学校、幼稚園など14の学校を擁する学園となり、大学規模（在学生数）で言えば全国11位、カトリックを含む日本のキリスト教主義大学では最大規模となりました。２０１１年に木津川市に開校した「同志社国際学院初等部」は、同志社の建学の精神にのっとり、「よりよき人生を営むために生涯にわたって学び続ける人を、よりよき世界を実現するために世界を結ぶ行動をし続ける人を、そして、神様から与えられた生命を正しく生きるために愛を深め続ける人を育てる」というMission Statementを掲げており、日英両語で子どもたちは学んでいます。その開校年度、小学１～３年生が入学しましたが、その年に私は宗教科の教諭として着任いたしました。そして２０１５年３月に初めての卒業生が誕生し、その多くが同志社国際中学校に入学した４月、私も同志社国際学院初等部を離れ、現在の勤務校である神戸市御影にあります頌栄短期大学に奉職するようになりました。同志社卒業後、教会の牧師、そして学校の教師として勤めるようになり、中高一貫校→小学校→そして今は幼稚園教諭、保育士を養成する大学で学生と共に学んでおります。今回「幼児・初等教育を出発点とするキリスト教主義教育」と題してお話しいたします。日本ではこの「幼児・初等教育」に当たる教育は、幼稚園・保育園や小学校から始まります。今回の講演では、幼・小学校期における「キリスト教主義教育」がどのように展開されているのかについて、普遍的な話というよりは、私が教師として大切にしていることについて話させていただきます。そのことが、皆さんにとって、同志社の建学の精神、キリスト教に触れ、考えていただく機会に最終的になればと願っています。

自校教育として建学の精神を学ぶこと

今日どの大学でも「自校教育」の必要性が盛んに言われるようになりました。同志社の各キャンパス、各系列校・附属校には、新島の言葉である「良心之全身ニ充満シタル丈夫ノ起リ来ラン事ヲ」が刻まれている「良心碑」が、設置されています。それは「同志社とはどのような学校か」が言わば「表札」として掲げられているのです。同志社は、全身から良い心の香りがしてくるような人をこの学校は育てる、ということを目標として、また忘れてはならない使命として、毎日目に付くところに置いているのです。その良心を涵養するために、キリスト教主義に立った教育の展開という「信念」「こだわり」を新島はもっていました。「こだわり」と聞くと「頑固、融通が利かない」なんてやや否定的なイメージも付きまといます。しかし今日、新しい情報も明日には全く意味をもたないこともたくさんあります。「フェイク・ニュース」などというものも巷にあふれています。さまざまな場面での判断材料も日々変わっていく。そんな時代には「ここだけは譲れない。大事なもの・確かなもの」があることは、頑固かもしれないけれども、安定感、安心感のあることだと私は日々感じさせられています。どんなに迷っても、判断する時に基準があるのです。皆さんが社会に出る４年後、また来年、世界が、日本が、関西がどんな時代を生きているのか、正直想像もつきません。そんな時代、社会はゴールや目的地までの最短距離を求めます。その一つの表れでしょうか、本屋さんに行くといわゆる「How to」本が並んでいます。「すぐに役に立つ知識」「すぐに痩せるために～」なんて言葉に私もすぐに踊らされそうになるのですが、世の中「錬金術」のようなことは大体嘘ですし、真理として「すぐに役に立つことは、すぐに役に立たなくなる」ものです。だからこそ、どんな時代に生きていても、「確かなもの」を聖書は語っている、と私は信じています。それは具体的に見える形で示される答えではないかもしれません。しかし今日のような時代にこそ、目先の目に見えることばかりを追うのではなく、目に見えないものに目を注ぐ感性を養っていくべきです。目に見えることだけが世界のすべてだとすると、世界はとっても窮屈だ、と私は思ってしまいます。そういう意味でも、目に見えないものに目を向け、目に見えない神の存在に心を向けることは、私たちの世界を広げ、「すぐに役に立たないけれど、すごく役に立つ」のだと思います。「何を言っているのだろう」と思われるかもしれません。しかし、いつかこういった感性が皆さんの人生を支えるに違いない、そう信じます。

ハタから見た同志社のすごさ

ハタから同志社を見ると、改めてすごいな、新島はすごいな、と感じることがたくさんあります。現在、頌栄短期大学の入試広報室長という立場で、私は日々悪戦苦闘しています。18歳人口の減少、４年制大学の進学率上昇と定員増は、短期大学への進学率の低下を招き、勤務校における入学者獲得に大きな影響を与えています。同志社大学などでしたら「学校が潰れる」なんてまずないことですが、小さな学校は今本当に大変なのです。大学の入学生獲得には、入学後の学びや学生生活がどれほど充実したものであるかを示しますが、入学したら「はい、後は勝手にやって」では今はやってはいけません。今日「エンロールメント・マネージメント」なんて言葉が、大学の広報活動でよく出てくるようになりました。「学生が大学に入学し、在学し、卒業するまでのフローを検査・調査し、管理しようとするＩＲ活動と企画機能」という意味ですが、要するに入学生を獲得し、辞めさせずに卒業させるということです。さらに卒業後についても在学中からサポートしていき、「この学校で学び、卒業すれば、このような未来の選択がある」ことを示すのです。入学生獲得は「入口」ですが、その時点で「出口」までどう導き、どんな「出口」がその先にあるのかを示していかないと、誰も今や入口に入ってくれないのです。皆さんの多くも同志社に入学する時点で、なんとなく、ぼんやりとでも「出口」はこんな風かな、と思ったことでしょう。「未来を示す、しかも自由に示す」。日々私に、私の所属する部署に求められていることですが、これがなかなか難しいのです。その観点で言えば、新島は正に天才としか言いようがありません。

新島曰く「我が校の門をくゞりたるものは、政治家になるもよし、宗教家になるもよし、實業家になるもよし、教育家になるもよし、文學者になるもよし。且つ少々角あるも可、奇骨あるも可、たゞかの優游不斷にして安逸を貪り、苟くも姑息の計を爲すが如き軟骨⊠には決してならぬこと、これ予の切に望み、偏に希ふところである」（森中章光編著「片鱗集」『新島襄集』丁字屋書店　１９５０年　２０４頁）と、有名な言葉を残していますが、新島は１００年以上前に、今、各大学が取り組もうとしていることを、同志社の門をくぐる一人ひとりへの期待として見事に言い表しているのです。この新島の時代を越えた思いや言葉を伝える才能には、ただただ驚くばかりです。そして新島の言葉は今も私たちの「今」に問いかけています。

頌栄と同志社

話は一気に変わりますが、現在私が勤務する頌栄短期大学は１８８９年10月に日本で最初のキリスト教主義の保育者養成校「頌栄保姆伝習所」として設立されました。創設者であるアニー・ライオン・ハウ（Annie Lyon Howe）は１８８７年に「教育宣教師」として来日しますが、その派遣元は「アメリカン・ボード」というアメリカの会衆派教会（Congregational Church）の海外伝道団体で、新島も同志社の草創期を支えた宣教師たちも、そのアメリカン・ボードによって日本に送られてきたのでした。アメリカン・ボードから最初に派遣された宣教師Ｄ・Ｃ・グリーンは１８７０年に神戸に伝道の拠点を置きました。そのことは後に多くの教会や「神戸女学院」、そして頌栄といった教育機関を生み出していく「神戸ステーション」設置へとつながっていきます。その働きから、切支丹禁令の高札が撤廃された後、１８７４年に11名の日本人が洗礼を受け「摂津第一公会」、現在の「日本基督教団神戸教会」が設立されました。そして１８８６年、神戸教会の女性たちを中心に「神戸婦人会」が結成され、日本における幼児教育の必要性をアメリカン・ボードに訴えたのでした。それを受けて同年、妻死去のためアメリカ帰国中のＪ・デイヴィスが、自身の３人の子どもたちが学ぶオハイオ州オベリンへ行った際に、日本伝道のための講演をしたとされています。その中で、日本、そして神戸における幼児教育の必要性、幼稚園設立のために教師を必要としていることを語ります。その講演に心動かされた一人の女性が、アニー・ライオン・ハウだったのです。ハウは来日後、すぐに幼稚園設立のために奔走いたしましたが、まずは共に働く教師の必要性を感じ、１８８９年10月に「頌栄保姆伝習所」を設立し、翌月の11月に「頌栄幼稚園」を設立したのでした。ハウと新島の直接のかかわりについての記録としては、この年の秋から春にかけて新島は八重と共に病気保養のために神戸諏訪山、和楽園に滞在した際に「我等ハ十七日ノ朝迄ダッ〔ド〕レー、ハウ氏ノ家ニ客分トナレリ」（⑤４２４）というものがあります。

ハウの教育

明治のこの頃、幼児教育の重要性など、巷ではそう関心のもたれることではありませんでした。頌栄も先駆的に幼児教育に取り組みましたが、「子守の勉強をしている」などとよく揶揄されたとお聞きします。しかし幼児の教育が、どれほど個々人の成長にとって大切かをハウは信じ、何を言われようとも、子どものために命を捧げたのでした。

頌栄の建学の精神は「神をわれらの主とあがめ、神の子イエス・キリストをわれらの救い主とする信仰に立ち、広く神と人とに仕えるとともに、創設者アニー・Ｌ・ハウ先生がもっとも信奉されたフレーベルの教育理念を幼児の保育に生かすことを本学の建学の精神としている」とちょっと長い文なのですが、ポイントは「イエス・キリスト」と「フレーベルの教育理念」です。教職課程を取られている方は、名前くらいは知っていると思います。フリードリヒ・ヴィルヘルム・アウグスト・フレーベル（F. W. A. Fröbel, 1782～1852）は、57歳の時に幼稚園（Kindergarten）を設立した「幼稚園の父」と呼ばれる人です。フレーベルのキリスト教信仰については話が長くなるので踏み込みませんが、「幼稚園は貧富や階層の区別なくだれでも等しく教育を受ける権利があり、そこでの生活はお花畑のように個性豊かに花を咲かせた子どもたちが遊べるところでなければならない」との理念が「子どものその」＝「幼稚園」という名称とな

り、この考え方は今日の日本の幼児教育のベースになっています。その代表的著作『人間の教育』の中には「共同感情」という概念が出てきます（エリクソンにおける「基本的信頼感」と同意義とここでは捉える）。簡単に言うと、お母さんに抱きしめられ、包まれている安心感が、将来の精神的安定、安心感に関係しているというのです。最近よく電車で赤ちゃんを抱っこしながら、スマートフォンを操作されているお母さんを見ることがあります。赤ちゃんの思いは言葉にはなりませんが、きっと「私の方を見て。スマホの方が私より大切なの？」と感じているに違いありません。フレーベルも、幼稚園を設立した際に「おじいさんが子どもと踊っている」と馬鹿にされたと言います。それでも、この子どもたちの未来のために今幼稚園が必要なのだという、その信念に立って子どもたちを温かなまなざしで包み、育んでいったのでした。ハウはそのフレーベルの教育理念によって頌栄を設立し、これが日本のキリスト教幼児教育にとって大きな第一歩となったのでした。

キリスト教主義教育の原点

このようなキリスト教幼児・初等教育の原点は、さかのぼること２０００年前のイエス・キリストの姿、暖かなまなざしです。

人々が子どもたちをイエスのもとに連れて来た時、弟子たちが人々を叱るのを見て憤り、弟子たちに「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」と言われ、そして子どもを交わりに招き、子どもたちを抱き上げ、手を置いて祝福されました（マルコによる福音書10章13～16節）。

当時のパレスチナ地方での子どもに対する観方は、一人前でない小さな存在、大人にならない未熟な存在として扱われていました。それに対してイエス・キリストは、小さな子どもを愛し受け入れ一人の祝福する存在とし、さらに子どもを神の国への態度を示す模範として、大人の既成の価値観や営みに対する厳しい問いかけをしたのでした。

イエスが子どもたちを抱き上げ祝福された姿を追って、子どもたちを愛することが一人ひとりの未来につながると信じて、キリスト教は今も幼児・初等教育に従事しているのです。キリスト教教育が為すべき業の一つは、一人ひとりが神のまなざしに包まれ、愛されていることを実感できる環境を整えること、と私は感じています。愛されていることに安心感を得る中で、大切な一つひとつの学びを自由になしていくことができるのです。そしてその安心感は自己肯定感となり、自己肯定を前提に他者を肯定することが初めて私たちにはできるのです。どんな時も愛されている、その実感の上に建てられていく一人ひとりの人格は、「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」（レビ記19章18節）という聖書の言葉を体現することができるのです。

幼児・初等教育においてキリスト教主義教育が何を大切にしているかについて考えてきましたが、同志社がこれまでと変わらずに、これからも建学の精神に立つという「こだわり」を頑固にもって、そして新島が一人ひとりを大切にした姿を追って、ここに学ぶすべての人が、神の愛を感じることのできる教育環境として存在し続けることを願っています。

２０１７年５月31日　同志社スピリット・ウィーク春学期
今出川校地「講演」記録